
七守学園ダンジョン部へようこそ

シロタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七守学園ダンジョン部へようこそ

【Nコード】

N2192W

【作者名】

シロタカ

【あらすじ】

昼はのんびり学園生活、放課後は剣と魔法の冒険活劇。

七守学園には人知れず存在する謎のクラブがあった。放課後に学園のあちらこちらに出現するダンジョンを攻略し、一般生徒の平穏な学園ライフを守る彼らこそ『ダンジョン部』。

氷の女帝とあだ名されるパラメータカンストのLv.99の【遊び人】部長を筆頭に、個性の強い【盗賊】【バーサーカー】【薬師】

の先輩方。

元いじめられっ子の新米【ナイト】は、同じく一年生のツンデレ委員長【アーチャー】、イケメン不良【ランサー】と共に、今日もここつとレベル上げ。目指すは前人未到のランク10、旧校舎の迷宮の制覇。

『人を好きになるなんて、初めてだった』

教室の扉を開けると、そこはダンジョンだった。

・進む。

・逃げる。

教室へ忘れ物を取りにやって来ただけの僕に、大きな選択肢が突きつけられた。

それは今後の高校生活の行く末を決定づける——あるいは、高校生活どこるか一生の運命すら左右する選択肢だった。だから、迷うべきだった。もしも未来の僕の声が届くならば、「ちゃんと悩め」と叫ぶだろう。

だって、その方が格好がつくから。

僕は、なんとなく、選んでしまった。

○ ・進む。

・逃げる。

ああ、後悔。

でも、後悔なんて意味がない。

頭の中で決定ボタンを押した瞬間、選択肢は取り返しのつかないものになる。人生というゲームはシビアだ。セーブはできず、コンテニューもできない。死んでしまえば、そこでゲームオーバーだ。

だから、後悔なんて意味がない。

そして、実際の所、僕は後悔なんてしていなかった。

さて、自己紹介をしておこう。

僕の名前は青砥ソウヤ。その年、高校生になったばかりの一年生である。パラメータは脆弱、職業はまだない。サブクラスは元いじめられっ子。スキルでたとえるならば、【臆病】【無口】【逃げ足】と云ったところか。

もちろん、Lv.1。

では、始めよう。

運命を回そう。

ゲームスタート。

僕は、恐る恐るダンジョンへ足を踏み入れた。そこに教室の面影はなかった。暗く澱んだ空気が立ち込めていた。黒板はどこにも見えない。教卓もない、机もない。板張りの床もグラウンドが見える窓すら——何も、なかった。

目の前には石造りの回廊が続いていた。じめじめと湿気が多く、カビ臭い空気が漂う。もとの教室の大きさと比較にならないほど広いようだ。腰が引けた状態で、恐々と前へ進んだ。

やがて、四つ角にたどり着いた。

- ・ まっすぐ進む。
- ・ 引き返す。
- ・ 右に行く。
- ・ 左に行く。

もしかすれば、その時はまだ、後戻りができたのかもしれない。結局、選択したのは僕なのだ。僕は争いに巻き込まれたわけでもなく、運命の声に呼ばれたわけでもない。空から女の子が降って来たわけでもない。神様が力を授けてくれたわけでもない。

ただ身近にあって気づいていなかった《そうした世界》に、自らの選択で足を踏み入れた。

それだけの話だ。

僕は、運命を、自分の意思で決めた。

- ・ まっすぐ進む。
- ・ 引き返す。
-
- ・ 右に行く。
- ・ 左に行く。

進むこと、さらに数分。

「宝箱？」

道は、袋小路になっていた。その行き止まりには木箱が置かれていた。鍵はかかっておらず、僕は息を呑みながら箱を開けた。

・剣（？）

ぽかんと呆けた後、僕は木箱の底に横たわる剣を拾い上げる。ずしりと重い感触が、おもちゃでないことを教えた。その重量にふらふらと頼りなくよろめきながら、鞘を抜いてみる。薄暗いダンジョンの中で、大振りの刃物が妖しく輝いた。

何が起こっているのか、僕はわからなかった。剣を掲げたままですらんとしていた。ただし、それほど長い時間そうしていたわけではない。

なぜならば。

危険が、僕の背後から、ゆっくりと近づいて来ていたからだ。

それは最初の試練だった。

聞こえてきた足音に、小さく飛び上がった。心臓が飛び出そうないきで、慌てて振り返る。暗闇に目をこらした。僕が歩いてきたばかりの道である。これまで誰にも会わなかった。ならば、先ほどの四つ角で見た別の道から、何かがやって来たことになる。

手に入れたばかりの剣を、汗ばんだ手で握りしめた。

薄闇の中からあらわれたのは、大きな獣だった。

それは、見たこともない化物だった。犬にも見えるが、大型犬などより一回りも二回りも体格が大きい。むしろ、動物園で見たことのあるライオンに近かった。

体毛の一部が、硬質な鱗のようになっていた。

背中には、巨大なコウモリの翼が生えていた。

尻尾は蛇だ。それ単体で生きているかのように、蠢いている。

唸り声と共に、だらだらと涎を零している。巨大な牙がのぞいている。四肢にも鋭利な爪が見えた。痩せた僕の身体など、その牙と爪にかかれば、ボロ雑巾のように引き裂かれてしまうだろう。

その時の僕はまだ知る由もなかったが、そいつは【キマイラ】と呼ばれるモンスターだった。

悲鳴は出なかった。

恐ろしさのあまり、乾いた笑い声のような音が、喉から漏れた。

後悔など、意味をなさない。

そして、実際のところ、後悔して泣き叫んだり、死ぬことの恐怖を覚えたり、これまでの人生を反省したり——空っぽの僕には、この世に思い残す未練なんてなくて、それに気づいて絶望的な気分になったり——そんな悠長な時間、まるでなかった。

モンスターは襲いかかって来た。

一撃目を避けた。

この最初の試練において、僕に褒められるところがあるとすれば、その奇襲を避けたことだ。ダイビングするように石畳へ身を投げ出

していた。受け身の余裕もなかったが、恐怖のあまり、痛みも感じなかった。

荒い息のまま、なぜこんなことになっているのか、考えた。

思考はまとまらず、泣きたくなった。涙でかすむ目で、背後を振り返る。モンスターは赤い瞳で僕を見つめていた。唸り声、殺気。すぐにでも攻撃してくることが、嫌でもわかった。

・戦う。

・逃げる。

迷うまでもない。

・戦う

○ ・逃げる

僕は、逃げた。

一撃目を避けたことで、僕とモンスターの位置は入れ替わっていた。転がるように、前へ走った。四つ角が見えた。だが、背後に獣の唸り声も聞こえてきた。すぐ真後ろだ。

追いつかれる——そう思った瞬間、身体が動いた。

振り向く。

その動きで、重い剣を、横薙ぎに振るった。

まさに、獣は僕の真後ろにいた。飛びかかっていた。大きな口が、

目の前に広がっていた。噛みつかれる。首をへし折られる。もうだめだ——そんな風に覚悟すら決めた、刹那のタイミング。

剣を、モンスターの胴体に、叩き込んだ。

まるで岩をバットで殴ったようだった。その反動で、僕は剣を取り落としてしまった。刃を扱ったことのない素人だから、刃筋を立てて斬ることなどできなかった。それでも多少のダメージはあったようで、ほんの少し、モンスターの動きが鈍った。

予想外の反撃に警戒したのだろうか。

モンスターは一定の距離を開けて、僕の動きを様子見ていた。

もちろん、僕には、次の手などない。

剣は、遠く離れた場所に転がっていた。拾い上げている暇はなく、もう一度走って逃げようにも、先と同じようにすぐさま追いつかれてしまうだろう。

「嘘」

笑っしかなかった。

「死ぬ？」

こんな意味のわからない場所で。

何もわからないままに、終わるのだろうか。

「誰か、助けて……」

情けない嗚咽を漏らした時だった。

運命が、変わる。

僕の運命が——中学校までいじめられて、友達もおらず、地元を逃げるように離れて、このまま何も変わらず、何も変えられず、世界の隅っこで生きていくことを覚悟していた——情けなく、惨めで、意味のない僕の運命が——。

その瞬間に、変わった。

「誰だい、君？」

その人は、いつのまにか、僕のそばに立っていた。

長身で、切れ長の瞳。モデルのような体型に、短い髪形が洒落ていた。細長い手足、繊細な指先。七守学園の制服に身を包んでいる。だが、高校生らしい格好が、どこか不釣り合いだった。ただの女子高生では浮かべることのできない、冷たい表情。冷たい笑顔。それは、まるで死神のようで——。

同じ人間とは思えなかった。

でも、怖いなんて感じなかった。

僕は、ただ、目を奪われて——。

「入部希望者かな？」

何も云えなかった。

赤子のように、言葉を忘れていた。

唸り声が聞こえた。そこで、ようやく現実に取り戻される。モンスターが身を低くして、三度目の正直とばかりに力を溜めていた。そうだ。ピンチは何も変わっていない。モンスターからすれば、餌が増えたに過ぎないだろう。

来る——そう感じた瞬間、敵は襲いかかって来た。

僕は悲鳴をあげた。

「うるさい」

目の前で、モンスターの首が吹き飛んだ。

女性が、蹴った。

うん、そうなのだ。

蹴った——それだけだ。

体育で、サッカーボールのパス回しをするような気楽さで、足をぼんと伸ばした。その爪先が丸太のように太いモンスターの首に触れた瞬間、ぐしゃり——と、物凄い音を立てて、目の前からモンスターの首が吹き飛んだ。

「弱いね。つまらない」

モンスターが絶命すると同時、ダンジョンが幻であつたかのように、ぐにやりと蜃気楼のように姿を歪ませた。眩暈を覚えて、僕は目を閉ざした。恐る恐る開いた時、そこは普段の教室に戻っていた。

夜の教室。

僕は、床にへたり込む。

その人は、堂々と立っていた。

「それで、ダンジョン部に入る？」

彼女は冷やかすような笑みと共に、僕の手を取った。

華奢な腕とは裏腹な力強さで、僕は引っ張りあげられた。

女性に手を握られるなんて、初めてだった。女性とこんな間近で話をするなんて、初めてだった。女性に冷やかされるように頭を撫でられるなんて、初めてだった。

命を救われるなんて、初めてだった。

運命が変わる。

人を好きになるなんて、初めてだった。

これが、僕と七守学園ダンジョン部との出会いである。

これが、僕と三千字ナメ部長との出会いである。

『僕はこれから、どうなるのですか？』

高校一年、春。

僕は震えていた。

布団を頭から被ったまま、一晩中、眠りの境目で夢とも幻とも判断できない出来事に思いを巡らせていた。感情の昂りは、はたして恐怖が原因なのか、興奮なのか。

昨日、僕はダンジョンに足を踏み入れた。

そこで悪夢のような体験をして、夢のような人に出会った。

目覚ましのベルが、ふわふわした僕の意識を現実へ引き戻す。布団から亀のように頭を出せば、そこは小さなアパートの一室。実家を離れて、七守学園がある青鳥町で独り暮らしを始めて、もう一カ月以上になる。

バターだけ塗ったトーストを食べて、朝の身支度を調える。アパートから学校まで、徒歩で十分もかからない。当然ながら、通学路には同じ制服を着た生徒がたくさんいた。

僕はいつでも、地面を見ながら歩く。数人で歩く集団を追い抜くタイミングが見つからない時は、意味もなく携帯を取り出す。何よりも気が滅入るのは、道中でクラスメイトを見かけた時だ。必死に気づかなかった振りをする。

七守学園の校門を抜けて、校舎の二階にある一年一組の教室に向

かう。

四月下旬、ゴールデンウィークの後ろ姿も見えてきた時期である。入学式からの数週間で、既にほとんど固定化された仲良しグループが、教室のあちこちで話に華を咲かせていた。僕は当然ながら、無言のまま自分の席へ着く。

朝礼が始まるまでの時間、本を読んで過ごすのが日課だ。

誰も知る人のない土地に逃げてきた。

だから、僕を知る人はいない。僕が知る人もいない。

七守学園は、幼稚園から大学までの一貫教育を標榜する大きな学校だった。進学校としても名高いが、体育科や芸術科もそなえることや、その特徴的な教育理念から多種多様な生徒が集まる——ということらしい。

僕としては、実家から逃げる口実ができるならば、高校はどこでもよかった。

七守学園は全国的に有名で、日本中から学生が集まって来る。高等部であつても寮暮らしやアパート暮らしをする生徒が多いため、両親に説明がしやすい——僕が七守学園を受験したのは、そんな単純な理由からだ。

ちなみに、僕みたいに高等部から入学する生徒以外に、エスカレーター式に進学してきた内部生もたくさんいる。そんな生徒は最初から仲良しグループを作っていて、僕のような外部からの受験生は、新しく自分たちでグループを作るか、気の合うグループを見つけて

少しずつ吸収されるか、そのどちらかだった。

僕は、どちらも選ばなかった。

そもそも、友達ができなかった。

自分から話しかけるような勇氣はなく、わざわざ話しかけてくれるクラスメイトにも、生返事しかできなかった。そうして現在、僕は見事に独りぼっちだ。いじめられているわけではない。ただ単に、僕は自業自得で孤立している。

それでも、ここは天国だ。

注目を集めることもなく、誰かに誉められることもなく、誰かに嫌われることもない。迷惑をかけず、暴力を受けず、ただ石の下に潜む小さな虫のように、僕は生きていたい。

そう願っていた。

「やあ」

入学から数週間が経った今、僕に話しかけるクラスメイトはいない。だから最初、僕は声をかけられていることに気づかず、ナチュラルに相手を見捨てる形になった。

教室がざわめいた。

さすがの僕も読んでいた本から顔をあげて、周囲を眺めた。そして、ぎょっとした。クラスの全員が僕に注目していた。全身から嫌な汗が吹き出し、気持ち悪くなる。

何が起きたのか、理解できなかった。

「私を待たせるなんて、君は勇敢な男の子だね」

本を奪われた。

目の前に、三年生の女子がいた。

なぜ、三年生とわかったのか——理由は単純で、七守学園の女子の制服は、学年によってスカートの色が異なるのだ。

一年生はブルー、二年生はイエロー、三年生はレッド。

目の前に、危険色の赤が見えていた。

その三年生の先輩は——昨夜、僕の命を助けてくれた人だった。男子と比較しても、遙かに背が高い。手足が針金のように細長く、華奢な体格は、平凡な高校生とはもはや別種の生き物にすら見えた。

はつきり云って、美人だった。

切れ長の瞳は鋭く、真正面から見下ろされると、威圧感がすごい。髪はショートカット、染めた様子もなく、カラスやコウモリのように真っ黒だ。

「昨晚のこと、君は酷いと思わないか。何も云わずに、私だけ置いていくななんて。あんなにも夜遅い時間なんだから、家まで送っていく程度の気を利かせるべきだ。それが、男の子の役目だと思うけれどね」

教室のざわめきが、大きくなった。

僕の流す汗は、冷や汗から脂汗になった。

「今日は、逃がさない」

その人は、きっぱりと云い切った。

「今夜は、たつぷりと、私に付き合ってもらおう」

教室のざわめきに、女子の黄色い悲鳴が混じった。

僕は、もう何も云えなかった。

「人質として、この本は預かろう。本を返して欲しければ、放課後、私の教室まで来なさい。云っておくけれど、私は待つのが嫌いだ。賢い犬ならば、急いで来るものだよ。そうしたら、少しぐらい、可愛がってあげよう」

僕の平穏な時間は、見事に、粉々に打ち砕かれた。

その人が去った後も、教室のざわめきは静まることがなかった。

胃が痛くなり、耐えきれず、トイレにでも避難しようと思った時である。

「ちょっと」

呼び止められた。

「青砥くん、あなた……」

友達のいない僕には、当然、気安く声かけて来る人もいない。教室中に波紋を呼んだ今の出来事に関しても、みんな、ひそひそと仲間内で話すばかりだ。クラスで孤立している人間に話しかけるのは、やっぱりためらわれるのだろう。

そんな中で進み出たのは、やっぱりと云うべきか、周防さんだった。

白状すると、僕はクラスメイトの名前をほとんど覚えていない。話し相手すらいなかったため、名前を知らなくても、まるで問題がないのだ。それでも、彼女——周防力ナメさんだけは覚えていた。彼女はクラスのリーダー的ポジションにいて、それだけ目立つ人なのだ。

周防力ナメ。

委員長。

白と黒をはっきり仕分ける、真面目さん。

黒髪ストレートに、ぱっちり大きな瞳。男子相手にも物怖じせず、はつきりと物を云う。口調が厳しく、常に怒っているような雰囲気、はつきり云って、喧嘩っ早い。つまり、僕のような人間からすれば天敵である。苦手だった。怖いとすら感じる。

既に人間関係も固まって、個々のグループが形成された教室において、未だに僕に声かけるクラスメイトと云えば、彼女ぐらいである。もちろん、僕と彼女が仲が良いというわけではない。彼女が委

員長の仕事などで、事務的に話しかけてくるだけのことだ。

「三千字先輩と、知り合いなの？」

周防さんの言葉は、まるで僕を問い詰めるかのようだ。

耳慣れない響きに、僕は思わず首を傾げた。

すると、周防さんは呆れた顔になった。

「三千字ナナメ先輩よ、まさか……」

——知らないわけないでしょう？

無言の内に、そう云われてしまう。僕は平静を装いながら、慌てて記憶をひっくり返す羽目になった。

サンセンジ——原稿用紙で八枚弱の文字数という、漢字で書けば非常に奇妙な字面、三千字。唐突に云われて面食らったが、あらためて頭に文字で思い浮かべれば、閃くものがあつた。

僕が休み時間、寝たふりをして机に突っ伏していると、クラスメイトの噂話でよく聞こえてきたものだ。三千字ナナメと云えば、この七守学園高等部において、その名を聞かない日はないぐらいの有名な人だった。

『氷の女帝』

『微笑みの刃』

『蜘蛛の巣の愛』

『七番目の魔法使い』

それらは、三千字先輩の通り名である。僕がツツコミを入れるまでもなく、なんだそれは——という、あだ名ばかりだ。ただし、その大層な通り名を説明する伝説の数々も、フィクションの映画顔負けの派手さで語り継がれている。

その伝説を、今さら詳細に語る必要はないはずだ。真偽の知れないそんな噂話よりも、僕自身が体験した昨夜の出来事が、何よりも雄弁に、彼女の特別さを物語る。

「青砥くん、三千字先輩と親しそくに話していたけれど、どういう関係なの？」

取り調べでも受けている気分だった。

僕は何も云えなかった。蛇ににらまれた蛙である。周防さんの厳しい眼差しに、身体が完全に硬直していた。口を開こうにも、頭が真っ白になってしまって、さっぱり言葉が思いつかない。

加えて、問われる程の関係など、僕と三千字先輩にはそもそもない。

誰よりも混乱し、慌てていたのは、僕である。

誰か教えてくれるならば、教えてほしかった。

僕はこれから、どうなるのですか？

『僕の関係ないところで、話が進んでいきます』

居心地の悪いまま、放課後。

どうして居心地が悪いか？

僕の後ろの席が、周防さんだからである。

「青砥くん」

放課後を告げるチャイムが鳴ると同時、誰よりも早く教室を飛び出そうとした僕の目の前に、周防さんが立ちはだかる。教室の出入り口をふさぎ、さながら門番のように——ここを通りたくば、私を倒していきなさい……みたいな。

ちなみに、勝ち目はゼロである。

その厳しい眼差しにさらされただけで、僕は動けなくなる。

朝から一日中、その視線を背後に感じていたため、今日の僕はかっつてない肩こりを感じているほどだ。

「三千字先輩のところに、行くのよね？」

それは質問の形をしていたが、実際は、僕に「Yes」以外の返答を許さないものだった。

僕が曖昧なまま沈黙していると、周防さんはこう云った。

「私も行くわ」

なぜ？

心の中で尋ねてみても、彼女は返事をしてくれなかった。

「三千字先輩は、三年一組よ。ほら、急ぎましょう」

周防さんがついて来るといふより、僕の方こそ金魚のフンのようだった。彼女は廊下の真ん中を、堂々と進む。僕みたいな人間が彼女の横に並ぶのは申し訳ない気がして、自然と後ろからついていく形になる。

そうやって歩いているとよくわかるが、すれ違う男子はことごとく、周防さんの方を振り返る。その後、僕の方を見て、値踏みするような視線になる。こいつよりは、俺の方がふさわしいよな——そんな心の内が透けて見えて、僕は全力で「そうです」と肯定するのだけれど、僕と彼らのテレパシーは繋がらない。

僕が自身の存在感をミジンコぐらいまで圧縮しようと悪戦苦闘している内に、やがて三年生の教室が居並ぶ場所までやって来た。学年が違うと、階も違う。普段は足を踏み入れることなどなかった。

「じいよ」

周防さんが足を止める。

「すみません」

彼女は、なんと、教室の入り口で、大きな声で、そんな風に、不

特定多数の上級生へ、声かけた。

当然、教室の中にいた三年生全員の視線が、周防さんへ突き刺さる。

凄い。

怖い。

僕は、周防さんに畏怖すら感じた。彼女はそうすることが当然のように、平然と行動を選択した。今の行動、その選択肢を僕に置き換えるならば、たぶんこんな感じ。

- ・教室の前で、右往左往する。
- ・ちらちらと、中をのぞき込む。
- ・なんだか怖くなって、引き返す。
- ・声かける（必要パラメータ：度胸50）

ちなみに、僕の現在の度胸パラメータは、マイナスの域である。

「三千字先輩は、いらっしやいますか？」

周防さんは、自身に注目が集まったことを見てとるや、そんな風に大声で尋ねた。

そんな彼女を見て、僕の中では既に神格化が始まっていた。彼女を讃え、彼女を崇め、彼女に祈れば、もしかすれば、僕にも奇跡が起きるのではないだろうか。彼女の数パーセントでも、僕に度胸とコミュニケーション力があれば、きっと世界は変わる。

万歳、周防さん。

そんな風に僕がくらくらと頭を抱えている間、彼女の問いを受けて、三年一組の上級生達は、それぞれ顔を見合わせていた。そして、彼らはほぼ一斉に、僕と周防さんの方を指さしたのだ。

え？

なにそれ、怖い。

周防さんは振り返り、僕を見た。彼女の瞳が、驚きに見開かれる。いくらなんでも、毎日見ているクラスメイトの顔に対して、その反応は酷くないだろうか。こんな僕でも、傷つく時は傷つく。

だが、周防さんの瞳は、僕をうつしていなかった。

周防さんはどうやら、僕の背後を見ているようだった。

「やあ、よく来たね」

僕が振り返ると、ぴたりと背中に貼りつくような位置に、三千字先輩が立っていた。

「ぎゃあ」

思わず、悲鳴をあげた。

「うん、女性の顔を見て、その反応は酷い」

先輩は、冷たく笑った。

「君に対しては、私はまだ、何も酷いことはしていないのだから。なにもそこまで驚かなくていいじゃないか。これでも容姿端麗と自負しているのだけど、君の瞳には、悲鳴をあげるほどの醜女に見えるのかな？」

その指先が、からかうように、僕の頬を撫でた。

当然ながら、僕に言葉を発する余裕などなかった。

「三千字先輩」

僕のかわりに、先輩へ呼びかけたのは周防さんだった。

さすが度胸パラメータ、50オーバーである。

「おや？」

そこで初めて気がついたような顔で、三千字先輩は周防さんの方へ目をやった。そして、ショーウィンドウを眺める買い物客のように、悩ましげに腕を組んだ。

「これは悪いことをした。この坊やの彼女かな？」

「違います」

周防さんは断言した。

「断じて」

倒置法だ。

「違います」

いや、繰り返したった。

「では、君は誰かな？」

「周防カナメです。青砥くんと同じ、一年一組です。彼が三年生の教室の位置に詳しくなさそうだったので、道案内としてついて来ました。それに、三千字先輩のことは兄から色々と聞いていましたから、お会いする機会があればと、入学した時から思っていましたで……」

「周防？」

三千字先輩は、思い当たるところがあるのか、目を細めた。そうして、あらためて周防さんを眺めていた。

「そうか。元生徒会長の妹さんか。なるほど、そうなれば邪険にするわけにはいかないね。周防先輩には、色々と尻拭いをさせてしまったから、私としても恩を返す前に卒業されてしまって、困っていたところだ。しかし、妹がいるとは聞いていなかった。それも、こんなに可愛らしい妹さんとは、ね」

「ありがとうございます」

周防さんは褒められ慣れているのか、冷静に——冷徹にも思える声で、返した。

「では、カナメ君」

三千字先輩は、あらためて云った。

「今日、私はこの……アオト君と云ったかな？」

先輩が僕の方を見て、問いかける。

「そういえば、ちゃんと名前を聞いていなかったし、私も名乗って
いなかった。形式的でも、こうしたお約束事は大事だ。私の名前は、
三千字ナナメ。見たとおり、女子高生だ。副業で色々やっている
けれど、それはまた別のところ、別の話でしょう」

先輩は冷たく笑って、僕に矛先を向ける。

「名乗りなさい」

「青砥ソウヤです」

「よろしい」

喉を締めあげられるような心地で、反射的に声が出た。

「さて、今日、私はこのソウヤ君に用がある。ちょっと時間のかか
る要件になるけれど、カナメ君はどうする？」

「どうする……と、そう尋ねられるということは、私もいっしょに
行っっていいという事ですか？」

「もちろん。ただし、ついて来た事を後悔するかもしれない。なに

せ、危険な事だ。最悪、大怪我をする可能性だつてある。それでも来たいと云うならば、私は君の意思を尊重しよう」

ん？

危険？

大怪我をする可能性？

なぜか、僕が先輩に連れて行かれることは決定事項のように扱われているけれど、もちろん、承諾した記憶などない。そもそも、朝一番に命令された時は、先輩のところへ来るように云われただけで、それ以上は何も聞かされていないのだ。

元いじめられっ子の危険察知能力を侮るなかれ。

そして、察知しながら何もできない、何も云えない、元いじめられっ子の無様な姿を見るべし。

「……」

僕が黙っている間に、周防さんは毅然として云った。

「行きます。連れて行ってください」

僕の関係ないところで、話が進んでいきます。

『だから、泣いてません』

両手に花。

ごめんなさい。嘘です。

三千字先輩と周防さん、高嶺の花どころか、腐った僕の目が視界にうつしてしまうだけでも恐れ多いような、天上の存在である。枯れた雑草のような僕が横に並ぶなど、添え物としてでも許されない。

だから、二人が前に行く。

僕は、もうしわけないもうしわけない——と、誰に向けているかもわからない謝罪を内心で繰り返しながら、ひっそりと後続く。

三千字先輩と周防さんが居並んで廊下を進むと、なんだかもう、それだけで注目を集めてしまう。先輩は云うに及ばず、周防さんも十分、衆目を集めるに足る容姿をしているからだ。

僕？

僕はもちろん、別の意味で衆目を集める容姿をしているだろう。

悲しくなるので、あまり云いたくないが、それすなわち、こんな感じである。

えー、なにあいつ、きもーい……みたいな。

「……」

泣いてません。

侮ってはいけない。

およそ物心ついた頃からいじめられていた僕に、スキはない。この一ヶ月で平和ボケしてしまった感はあるが、どんな罵倒も陰口も、耳には入れつつ、心には入れないという特別なスキルを、とっくの昔に獲得している。

だから、泣いてません。

「なに、泣きそうな顔してるのよ」

振り返った周防さんに、そんなことを云われた。

「それにしても……」

周防さんは、三千字先輩に話しかける。

「氷の女帝の名前は、伊達ではありませんね」

周防さんの言葉に、僕は内心でうなずいた。

まさに目の前で、三千字先輩にまつわる噂のひとつが、実証されていた。

先輩は、廊下の真ん中を歩く。

放課後を迎えたばかりで、部活へ向かう者、下校する者、立ち話に興じる者など、様々な生徒で廊下は混雑している。

だが、先輩が歩けば、モーゼの海割りのように、道が開けるのだ。

恐るべきことに、慌てたように道を譲る生徒のいくらかは、頭まで下げた。視線をあわせることすら、恐れ多いようだ。深々と下げた頭は、先輩が通り過ぎた後でも、しばらく持ち上がることはない。

「なにをすれば、こんな風になるんでしょうね？」

「ん、なんのことかな？」

三千字先輩、気にしていなかった。

気にも留めていなかった。

同学年の生徒が道を譲ることも、深々とお辞儀されていることも、眼中になかった。どうやら先輩にとって、その光景は当たり前なのらしい。人が歩く時、足元の蟻を気にしないように、先輩もまた、同学年の生徒など意識する対象でもないということ。

あらためて。

戦慄する。

すごい。

「……」

もちろん、心の中で叫んだだけのこと。

ところで。

二人といっしょに歩くというだけで、僕の心は既に崩壊寸算だったけれど、はたして、目的地はどこなのだろうか。先輩は「ついておいで」と云ったきり、黙々と歩き続けるだけだ。

階段を上る。

どうやら学校の外に行くわけではないらしい。

屋上へ出た。

屋上は普段、生徒の出入りは禁止されている。だから、扉はいつも施錠されているのだけれど、先輩は普通に鍵を取り出して開けていた。

まあ、ここまで来たら、その程度の事では驚かない。

先輩が、とんでもない人という事はわかった。

だから、僕の中で驚きのハードルはどんどん上がっている。このハードルを飛び越えるのは、もはや容易ではないだろう。これ以上驚くようなことは、そうそうないと云えた。

内心で、ドヤ顔。

人はこれを前フリと呼ぶ。

「屋上へ出て、どうするんですか?」

周防さんが尋ねる。

「バンジージャンプでもするんですか？」

それは真面目な周防さんにしては珍しいジョークだった。でも、場を和ませるというよりは、皮肉めいた物言いにも聞こえた。

三千字先輩は気にした様子もないけれど。

「ああ、それも面白そうだ。あいにく紐なんてないから、バンジージャンプするならば、何も身につけずにやることになるけれど……」

それはもう、単なる投身自殺ではなかるうか。

「ソウヤ君、やる？」

やりません。

心の中で叫びながら、僕は首を横に振った。

「新しい世界が開けるかもしれないよ？」

その場合の新世界は、どう考えても、黄泉の国だ。

「それで……」

周防さんが話の方向を修正する。

「ここで、何をするんですか？」

「いや、何もしないよ。少なくとも、屋上では何もしない」

屋上では……。

その言い方では、ここからさらに行く場所があるように思える。だが、屋上から続く道など、どこにもない。それこそ投身自殺の果ての天国か——いや、僕の場合は、地獄だろうか。

「こっちだよ」

先輩が手招きした。

屋上の片隅へ歩いていく。だが、当然ながら、そちらには何もなし。屋上はただっ広く、冷暖房やら給水関係のパイプや配線があちこちに通っているが、それだけだ。

先輩は、何でもない一カ所を指し示した。

「ここだ」

そして、云った。

「開けゴマ」

冗談のようだった。

だが、冗談ではなかった。

機械的な音声が響く。

『【遊び人】三千字ナナメ、認識完了』

何もないはずだった場所に、うつすら切れ込みが入ったかと思うと、そのままスライドして口が開いた。そこには降りる階段があった。

声紋認識の隠し扉？

さながら秘密基地である。

前フリを回収しておこう。

驚いた。

「……」

声も出ないほど驚いたと云いたいところだけど、僕が無口であるのはいつものことである。今さら僕が口を出してもバランスが悪くなるだけなので、進行役は周防さんにお任せしよう。

「こんな、馬鹿げた……なんですか、これ……？」

いい反応だった。

僕もあれくらい立派なリアクションが取れたならば、人間関係も良好にやっていけるのだろうか。

「部室だよ」

「部室？」

「いいから、ほら。入りなさい」

面倒そうに押しやられ、僕も周防さんも隠し扉の中へ足を踏み入れる。階段の勾配は、学校内のそれと変わらない。およそ一階分に相当するだろっ段数を下りきると、教室と同じ引き戸が見えた。

その扉にはプレートがかかっていた。

プレートには、こんな風に名前が書かれていた。

『七守学園ダンジョン部』

「……」

周防さんまで絶句していた。

困った。

僕がリアクションした方がいいのだろうか。

「こ、これは、いったい……?」

「……」

「……」

しまった。

スベった。

声がうわずった上に、台詞回しとしても寒い。

周防さんとはかくとして、三千字先輩まで沈黙させてしまうなんて、考え得る限り最低最悪の結果だ。静寂はしんと降り雪のように、僕はガタガタ震える羽目になった。

三千字先輩は振り返り、無言のまま、冷やかな目で僕を見た。背筋がぞくぞくした。周防さんは横目で僕を見て、何も云わず、ため息をついた。背筋がぞくぞくした。

もう何も云うまい——と、僕は誓った。

『なるほど、わかった——と、云えるだろうか』

ダンジョン部の部室。

いや、そもそもダンジョン部という名称が謎なので、自分で云ってみても違和感が凄いのだけれど……なにはともあれ、ダンジョン部の部室である。

そこは、広さだけで言えば、普通の教室と同じぐらいだった。ただし、教卓や黒板、生徒の机と云ったオーソドックスな備品はひとつもない。また、窓がないのも特徴のひとつだった。

部屋の真ん中に、生徒会室にあるような大きな作業机が置かれている。正面の壁には、大きなモニターが掛けられていた。高そうである。

入り口から見て右手には、別の扉があった。奥には別の部屋が続いているようだ。逆に、左手には幾つかロッカーが並んでいる。スチール棚もある。奥の方には、パソコンが備えられており、よくよく見れば、簡易的ながらキッチンまであった。

「……」

僕はもう、口を出さないと決めていた。下手なことを口走って、冷めた目で見られるのはこりごりだ。周防さんの方をこっそりうかがうと、まずい——目が合ってしまった。

周防）何か云いなさいよ。

僕）無理です。

周防）私に押しつける気？

僕）無理です。

周防）ちょっと、他に云うことないの？

僕）無理です。

凄い。

心が通じ合った。

僕の云いたいこと、周防さんの云いたいことが、互いに言葉にせずとも伝わった。それは僕にとって快挙であったが、問題は、明らかに周防さんの機嫌を損ねてしまったことだろう。

「二人とも、適当に座りなさい」

先輩は、呆然と立っていた僕と周防さんに、部屋の中央にある作業机を指し示して云った。本人は、奥にあるキッチンへ向かった。僕と周防さんが座席をひとつ離して座ったところに、先輩はお茶を煎れて戻ってきた。

勝手なイメージだけど、三千字先輩がそうした振る舞いをするのは意外だった。給仕の仕草も様になっていた。まるでプロのメイドのようだ。

「ありがとうございます」

周防さんは頭を下げた。僕もそれにならう。

「さて、君達もいい加減、気になっているだろうから、説明をしようか。ここが何なのか。ダンジョン部とは何なのか。まあ、実際のところ、大した話ではないよ。お茶でも飲みながら、ゆるりと聞き流す程度の話さ」

ダンジョン部。

その聞きなれない名称を耳にするのは、僕にとって、この場が初めてのことではない。昨晚、これまでの取るに足らない人生で培ってきた常識というものを、根底から揺るがしてしまうような非日常を体験した。

死にたいと思うことは、何度もあった。

死ぬと覚悟することは、初めてだった。

命を救ってくれた三千字先輩が、当惑して、混乱して、燃え尽きた灰のようになっていた僕へ告げた言葉が、それである。

——それで、ダンジョン部へ入る？

昨晚、僕が足を踏み入れてしまったあの場所こそ、ダンジョンと呼ぶにふさわしい。ダンジョン部と名乗るからには、あの異常事態に関わってくるのだらう。

そうした僕の読みは、見事に的中した。

まあ、褒められるほどの予想でもない。

三千字先輩の語った内容は、だいたい、こんな感じ。

七守学園が位置する青鳥町という場所は、その昔から、一種のパワースポットだった。妖怪や幽霊、魑魅魍魎と云った矮小な存在から、神や精霊と呼ばれる類の存在まで、自然と寄り集まって来る場所なのだとか。

そうした存在は、人間と共にあっても問題を及ぼさないものがある一方で、決して相入れないものもある。それはたとえば、野生の動物で考えてみるとわかりやすい。野良猫や野鳥がそこらにいても人間に大して影響を及ぼすものでもないが、熊やライオンが町中にあらわれれば、それは大変な問題になる。

とはいえ、青鳥町は古来よりそうした場所であるため、自衛のシステムは完成されているらしい。そうした存在に馴染みのない者達にとっては、それと気づかぬ間に、化物は駆逐されていく。だから町は表面上、至って平穏で平和な姿を保っている。

ただし。

問題は、この学校という場所である。

学校は、非常に閉鎖的な場所である。その環境は、基本的に部外者を排除する。学校の中に危険な存在が紛れ込んでしまったり、その異質な影響を受けてしまった場合、それを駆除することは、とても面倒になる。

そこで作られたのが、ダンジョン部である。

部外者が介入しにくいならば、その学生にやつてもらおうというわけだ。安直な考えだ。単純な考えだ。だが、七守学園は、確かにダンジョン部の存在を認めているのだ。

七守学園に現在、公式に存在する部活動は41個ある。

42番目のクラブとして、ダンジョン部は秘密の部室も与えられ、影ながら正式な予算も付されている。もちろん、公にすると色々問題が生じるため、その実状を知るのは教員の中でもごく一部ということだ。

なお、ダンジョンは、七守学園がシステムとして備えている結界が作用して生み出される。学園内に化物が紛れ込んだり、澱んだ力が流れ込んで来た場合、それらはどこかの教室に囚われる。さながらゴキブリホイホイだ。そうして、結界はモンスターの存在を秘匿し、その力を封じるため、空間を変質させる。結果、ダンジョンが生まれる。

日中、生徒がいる間、ダンジョンは出現しない。放課後、生徒がいない時間を見計らって、ダンジョン部の部員がダンジョンへ突入し、問題となるモンスターを退治するというわけだ。

うん。

どうだろうか。

なるほど、わかった——と、云えるだろうか。

「そ、そんな、馬鹿らしい話が……」

周防さんの肩が、ちよつと震えていた。

それはそうだろう。

僕自身、昨晚の体験があるからこそ、まだ普通に聞いていられたが、そうでなければ、吹き出してしまうところだ。真面目な周防さんにとっては、馬鹿にされたように聞こえるのではないだろうか。

まあ、たしかに。

怪物やら魔法やら、当たり前前に世界には存在しているけれど、それらは二ユースで見たり聞いたりすることで、平凡な僕みたいな人間には関わり合いのないものだ。

青鳥町が、そうした事象のメツカであるなど、知る由もなかった。とはいえ、七守学園の教育理念のうたい文句には、確かに他の学校には見られない『魔法使い』という単語が登場するのだから、勘が良ければ、予兆ぐらいは感じられたのかもしれない。

今となつては、手遅れな感是否めないけれど。

後悔するには、早すぎるだろうけれど。

「信じられないかな？」

三千字先輩が冷たく笑いかけるので、周防さんは激昂したように何事か叫びかけた。だが、先輩は軽くそれを押しとどめると、この展開を予期していたように、ゆっくり立ち上がった。

「それでは、行ってみようか。論より証拠だ」

嫌な予感がした。

「ダンジョンへ案内しよう」

周防さんは、望むところだと云わんばかりの目をしていた。僕と云えば、顔に死相を浮かべていたのではないだろうか。

帰りたと思った。

七時から見たい番組があるのだ。

『七時には帰って、家事をしたい』

言葉で説明されるよりも、やっぱり目で見る方が確実だ。そうして自分で確認してしまったからには、もはや反論はできない。

周防さんは絶句していた。

放課後。

六時を過ぎて、人の気配も途絶えた廊下を進み、三千字先輩が無造作に開けたのは、二年三組の教室だった。

教室の扉を抜ければ、そこはダンジョンでした。

二度目の僕に、驚きは少ない。

「さて、さつきも説明した通り……」

三千字先輩は、僕達に向けて云う。

「このダンジョンは、モンスターを捕らえるために存在している。言い換えれば、モンスターを退治してしまえば、ダンジョンは消える。まあ、クエストクリアという感じだ」

ちなみに——と、先輩は補足する。

「ダンジョンには、有用なアイテムも落ちている。手に入れてクリアすれば、それは実際に手元に残る。そのソウヤ君が持っている剣みたいだね」

そうなのだ。

僕は、先輩から剣を渡されていた。

忘れ物だ——と、先輩は笑いながら、部屋に保管されていた剣をくれた。それは昨晚、僕の命を繋いだ武器だ。思い出の品と呼ぶほど、思い入れがあるわけではない。だが、再び手にしてみると、多少の勇気がわいてくるような気もした。

まあ、あくまで、気持ちの問題。

「ダンジョンは、そこに囚われたモンスターによって規模を変える。単純に、モンスターの強さや危険度が増せば、ダンジョンはそれだけ大きくなる。部では便宜的に、これらを十の段階でランク付けしている。そのランクで言えば、このダンジョンは一番安全なレベル1だ」

初心者にはふさわしい——先輩は、そう云った。

「三千字先輩」

周防さんは、僕のことを指さして云った。

「まるで馬鹿らしくて、まだ壮大なドッキリではないかと疑っているのですが、もし万一、先輩のお話が本当だとするならば……」

周防さんはくどいぐらい前置きする。

「ここにはモンスターがいることになります。ソウヤ君は武器を持

っているからいいですけど、私は身を守るものを何も持っていない。せめて、なにか……」

「ああ、大丈夫さ。そんなこと」

三千字先輩は、意に介した様子なく、ひらりと手を振った。

「危険に陥ったならば、同級生なんだから、ソウヤ君に助けてもらえばいい。男の子に身を守ってもらうなんて、実際のところ、そう経験できることでもない。貴重な体験になるだろうさ」

周防さんが絶望的な目で、僕を見た。

待つてほしい。

僕が抱える絶望感だって、負けていない。

周防）どうしてあなたの方がそんな目をするのよ。

僕）負けるものか。

周防）情けなさで張り合ってどうするのよ。

またもやテレパシー。

周防さんの心の声が……いや、罵声が聞こえてくる。

「さて、行こうか」

僕と周防さんの胸中にはいっさい構うことなく、先輩は唯我独尊

の皇帝さながら、さつさとダンジョンの奥へ進んでいく。こうなれば、先輩に置いて行かれることが、何より怖い。

僕と周防さんは慌てて、先輩の後を追った。

大丈夫だ。

昨晚の出来事を思い返し、三千字先輩の圧倒的な実力を確かめる。どんなに凶悪なモンスターが出てきたところで、先輩といっしょにいれば大丈夫だ。

そう、先輩といっしょでさえいれば……。

前フリである。

「おや、道が分かれているね」

左右にそれぞれ道が伸びていた。

「では、私は右へ行こう。君達は、左へ行けばいい」

「え？」

「え？」

奇しくも、僕と周防さんの間抜けな声が重なった。

「ちょっと、ちょっと待ってください、先輩」

周防さんが慌てたように云う。僕も内心で抗議していたけれど、

それは当然、誰の耳にも届く予定はないので、周防さんのがんばりに期待するしかなかった。

「どうして分かれるんですか。私と青砥くんだけなんて、そんな危険な……」

「危険？ 大丈夫だよ、恐れることはない。この場合、憂慮すべきは、ダンジョンの踏破に時間がかかって、帰宅が遅れることだよ。私は七時には帰って、家事をしたいんだ」

「え、いや、でも……」

「ほら、大丈夫だよ」

先輩は、子供にでも語りかけるように、甘い声を出した。

「それとも、怖いのかな？ お化け屋敷には入れないタイプ？」

周防さんは、頬を赤くした。

先輩に対してくるりと背を向けると、そのまま無言で、左の道へどんどんと歩いて行く。それを見送る先輩の顔は、冷徹なまでに美しい笑顔で、僕はぞくぞくしたけれど、同時に、青ざめた。

ちょっと待ってほしい。

この展開は、まずい。

「ほら、ソウヤ君」

それ、きた。

「女の子を一人で行かせる気かい。戦う武器を持っているのは君だけなんだから、彼女と共に行って、守らないといけないよ」

楽しんでいる。

笑っている。

からかうような物言いに、僕は反論しなくなったが、よりにもよって、三千字先輩に口答えなどできなかった。結局、あきらめて、周防さんの後を追った。

途中で後ろを振り返れば、先輩の姿は既になかった。

勘弁してほしい。

僕は既に泣きそうになりながら、必死に周防さんを追いかけた。

『こんなダメ人間で、ごめんなさい』

目の前の熊から逃げるため、ライオンの巣に飛び込むようなもの。

三千字先輩の言葉に負けて、周防さんの後を追った僕を待ち受けていたのは、これ以上ないピンチだった。いや、別にモンスターに襲われているわけではない。僕に訪れている窮地は、物理的なものではなく、精神的なものだった。

静寂。

僕と周防さんの間に、身を突き刺すような沈黙が漂っていた。

石畳を踏み付ける革靴の音だけが、一定のリズムで耳を打つ。コツコツという甲高い音が、まるで周防さんからの叱責のように感じられて、心が痛んだ。

彼女の斜め後ろを、僕は影のようになって歩いていた。

足音を立てないように気を配りながら、息を潜める。彼女は怒ったように視線を険しくして、見通しの悪い通路をにらみ続けている。足音も高く響かせながら進む様は、堂々としているように見えて――どこか、やけっぱちになっているようにも思えた。

危うい。

僕は、そんな風に思っていた。

三千字先輩と別れてから、通路はずっと一直線で続いている。窓

もない石造りの回廊は、光源に乏しく、ほんのわずか先までしか視界が確保できない。もしも、危険な敵が待ち伏せしていたならば――今みたいに勢いだけで進んでいる最中に、果たして対応できるだろうか。

それに、歩き始めてから数分が経っている。三千字先輩が真逆の道を同じようなペースで進んでいるとすれば、もう随分と距離が離れていることになる。助けを求める悲鳴をあげて、それが届いたとしても、即座に駆けつけてもらえる距離ではない。

臆病者だから、そんなことを考える。

僕一人だけならば、慎重に進むだろう。慎重――そう言えば聞こえはいいが、要は姑息なのだ。できるだけ歩みを遅くして、三千字先輩との距離が離れないようにする。進めば進むだけ、危険な敵に遭遇する可能性が高くなるのだから、動かない方が安全だ。

極端に云ってしまえば、立ち止まっていることが最善だ。

右側の通路へ進んだ三千字先輩が、そちら側を踏破して戻って来るのを待つて、合流してから進めばいい。先輩には怒られるだろうけれど――見限られるかもしれないけれど、大怪我をしたり、死んでしまったりするよりは、ましじゃないだろうか。

今からでも遅くない。

進む。

戻る。

選択肢は残されている。

それなのに、僕は選べない。前を進む周防さんに、語りかけるだけの勇気がない。いや、それはたぶん勇気という程のことでもない。人として当たり前前の振る舞いができないという、欠陥者の言い訳だ。

僕は、黙り込む。

僕は、選択しない。

臆病者で、卑怯者。

選択肢はレッドゾーンへ入り、点滅を繰り返す。

僕は歯噛みしたまま、それを見送り、やがてタイムオーバー。

「ねえ」

周防さんが云った。

僕は当然、黙ったままだ。

「なにか云ってよ」

周防さんが足を止めた。

自然と、僕も立ち止まる。

振り返った周防さんが、僕を見つめる瞳を――僕は、見ることができない。

他人の瞳は、鏡である。そこに浮かぶ姿が、何よりも正しく、僕という人間を表現する。侮蔑される僕、嘲笑される僕——それらは、毎朝洗面台の鏡に映る姿よりも、遥かに正確に、僕という人間を映し出す。

たとえば。

あなたがこの世で一番醜い顔を持っていたとして、鏡をのぞき込みたいと思うだろうか。気味悪がられること、罵倒されること、差別されることを知りながら——それでも、前を向けるだろうか。

そんな自分を、誇れるだろうか。

僕には、無理だ。

だから、周防さんの視線から、目をそらす。

「青砥君」

名前を呼ばただけなのに、そこには明らかに怒りの声色が含まれていた。周防さんが怒るのも当然だ。話しかけたのに返事をしない。振り返ったのに、目も合わせない。そもそもここまで、一言も発しなかったのだから、変な奴と思われて——気味悪がられて当然だ。

「ごめんなさい。

こんなダメ人間で、ごめんなさい。

「ごめんなさい」

僕は、ようやく、周防さんの方を見た。

周防さんは、頭を下げていた。

罵倒されたり、陰口を叩かれたり——暴力を振るわれたり、物を隠されたり——にらまれたり、蔑まれたり——色々ないじめ方を、色々な同級生にされてきた僕だけど、こんな風に心臓が痛くなったのは、初めてだったかもしれない。

僕には、周防さんが謝る理由がわからない。

わからない——と、思いたい。

「青砥君のことを無視して、私ばかり騒いでごめんなさい。三千字先輩に声かけられたのは青砥君で、私は何も関係ないのに……。まだ、混乱しているの。わけがわからなくて。でも、そんなの言い訳にならないわよね。私が勝手に怒って、青砥君までこっちに付き合わせる事になってしまって、どんな風に謝ればいいかわからないけれど……」

周防さんは、おそらく、心底そう思っているのだろう。

彼女は、僕に対して怒っていたわけではなかった。どちらかと云えば、怒りは、三千字先輩に向けて——いや、むしろ状況に混乱して、戸惑っている自分に向いていたのかもしれない。僕みたいな人間失格が、彼女みたいに素晴らしい人間の内心を想像するなんて馬鹿らしいけれど、おそらく、そんな気がする。

ああ、そうだ。

周防さんは、素晴らしい。

真面目だとか、可愛いだとか、年上に対してもはつきり物を云えるとか、リーダーシップを取れるとか——彼女を凄いと思わせていたそんな色々が、途端に色褪せた。僕が絶対に踏み出せない一步を、あっさりと飛び越えた彼女——驚いたように見つめる僕の瞳に、そんな彼女の正しい姿は映っているだろうか。

僕は、云いかけた。

ありがとう。

こんなダメ人間が、思わず、感謝の言葉を口にしようとした、まさにその時——。

「危ない」

僕は、叫んだ。

彼女の背後から、巨大な何かが襲いかかった。

『彼女に向けて初めての言葉を』

スライムだった。

巨大な粘状の塊だから、足音も気配もなかった。周防さんからすれば背後から忍び寄せられた形だ。僕が気づかなければいけないかったのに、完全に注意がそれていた。そんな油断が、一瞬で窮地を招くということを知った。

端的に云おう。

周防さんは、飲み込まれた。

僕は一瞬、呆けた後で――悲鳴を、あげた。

いや、悲鳴なのか何かもわからない、叫び声をあげた。

僕の目の前で、ぶよぶよとした薄緑色の粘体が、蠢いていた。高校生として平均的な身長を持つ僕が見上げる程度には、巨大だった。女の子の頭から爪先まで丸呑みにしてしまうぐらいに、巨大だった。

僕は、そんなモンスターと遭遇した。

戦う

逃げる

選択肢が……。

「うるさい」

そんなものは、見えず――。

意味不明に、叫び――。

戦うこともせず、逃げることもせず、装備していた剣すら放り出して、まっすぐに手を伸ばした。その化け物に飲み込まれることが、どんな意味を持つか、わからない。わからないけれど、躊躇はなかった。気持ちの悪い感触に舌打ちをしながら、僕は腕に力を込めた。

ゼリーのようなスライムの体。

滑らかな表面に、爪を立てて、腕をめり込ませた。

表面の抵抗が嘘だったように、手が入ってしまえば、中身は柔らかかった。その感触が吐き気を誘ったけれど、関係ない。周防さんが飲み込まれた瞬間の方が、よっぽど気持ち悪かった。世界がぐるりとひっくり返ったように、吐きそうだった。

だから。

ぬるりとした粘体の中で、しっかりとした人間の身体を掴んだ時、僕は思わず、周防さん――と、彼女に向けて初めての言葉を吐き出していた。

「周防さん」

掴み取った手が、声に応えるように、僕の手を握り返した。

引っ張り出すのに、それほど苦勞はしなかった。スライムから彼

女の全身を引き剥がし、一目見たところでは怪我の類がないことを確認して、僕は思わずため息をつきそうになった。もちろん、そんな余裕はない。

ほんのわずかな時間とは云え、モンスターに丸呑みにされた周防さんは、ぐったりとしていた。当然ながら自分の足で立つ事などできないようで、スライムから助け出した彼女を、僕は抱きかかえるようにして運ぶことになった。

だけど、非力な僕が、人を抱えて機敏に動けるはずもない。

モンスターからほんの少し離れただけで、息が上がってしまった。

見れば、せっかく捕まえた獲物を奪われたせい、スライムはゆっくりとした動きながら、じりじりと間合いを詰めて来ていた。それは亀の歩みのような遅さだったけれど、動けそうにない周防さんを抱えた僕と比べれば、まあ、いい勝負だっただろう。

戦う

逃げる

周防さんを助け出したことで、火が、消えた。

気がつけば、全身がびっしょりと汗で濡れていた。そんな状態になるぐらい、激情に駆られていたようだ。後先も考えずに動いてしまっ程、頭に血が上っていたようだ。それらが冷めてしまうと、途端に震えが来た。

怖い。

その一言に、尽きる。

そうだ、三千字先輩だ——僕は背後を振り返るけれど、闇の濃い回廊にはまるで人氣がなく、向こう側から誰かがやって来るような足音もしなかった。

僕は救いを求めるように、後ろばかり見ていたが——そうする内、僕を見つめる瞳に気がついた。氣を失っているとはかり思っていた周防さんが、うつすらと目を開けていた。まだ状況が理解できていないのか、その瞳は胡乱な光を浮かべるばかりだったけれど——その理性もわずかな光の中に——僕は、自分を見てしまった。

怖い。

助けて。

戦う

逃げる

周防さんを助けるために放り捨てた剣を、今一度、拾い上げた。

両の手で握りしめて、それでもずっしりと重い剣を構えながら、僕は心の中で叫び続ける。

怖い。

怖い。

怖い。

「青砥君」

周防さんの声がした。

「ありがとう」

ありがとう。

僕は無我夢中で一步を踏み出した。素人剣法もいい所だ。頭の上に振りかぶろうとした剣は、その重みで、ふらふらと背中の方まで落ちてしまう。両腕の筋が張り詰めた。二の腕がつりそうだった。

情けない——悲鳴にも似たかけ声と共に、ほとんど転ぶも同然に、僕は剣を振り下ろした。

でも、それだけで。

スライムは、見事に真っ二つになった。

青砥ソウヤは、戦闘に勝利した。

嘘みたいだけれど。

僕は、勝った。

『美人と美少女のキスと僕』

モンスターを倒せば、ダンジョンは消え去る。

深夜のテレビ画面のように、視界がざらりとした砂嵐に包まれたかと思うと、ダンジョンは消失し、後には平凡なただの教室が残った。

だけど、非現実なものがいくつか——僕が両手に握る剣だとか、床に倒れたままの周防さんだとか。

女王のように教卓に腰掛ける三千字先輩だとか。

「おめでとう。クエストクリアだ」

長い脚を優雅に組んで、先輩は僕達二人を見下ろしていた。静まりかえった教室の中で、拍手の音が無機質に響いた。こんな時でも冷めた先輩の姿に、僕は——こんな僕が、いらだちを覚えた。

「なにか大変なことでもあった？」

のんきと云うよりも、愚鈍と呼ぶ方が似つかわしい物云いだ。

三千字先輩は首を傾げた。その様子は、明らかに僕をからかうものだ。何もかもお見通しなのに、あえてわからない振りをしている——それを悟って、僕は思わず叫んだ。

「先輩、周防さんが……」

云いかけた言葉は、途中で呑み込む羽目になった。

三千字先輩は笑った。

冷たく笑った。

先輩は軽やかに教卓から飛び降りると、僕の方へ歩み寄って来た。そして、雷鳴に怯える小犬でも相手にするように、僕のことを強く抱きしめた。背の高い先輩に抱かれて、僕は自然と、その胸に顔をうずめる形になる。

「がんばったね」

先輩はそんな風に、一言だけ褒めてくれた。

周防さんがモンスターに吞まれ、無我夢中で立ち向かって、使えない剣を振り回して――僕は、限界を迎えていた。吐露できない気持ちで、心が風船のように膨らんでいた。精一杯になったことなんてない、いつでも半端だった僕に、たった数分の出来事は刺激が強すぎた。

力が抜けた。

まるでそれを見越したように、先輩は抱きしめるのをやめた。

三千字先輩は、僕から離れると、そこできやく周防さんを見た。まだ起き上がれそうにない周防さんの傍に立つと、やや強引に、その身体を引っ張り上げる。

「困った子だ」

三千字先輩は、ため息をついた。

それから、怪しく笑った。

さて。

閑話休題。

まず、謝罪をしよう。

ここまで随分とシリアスな感じで話を進めてしまった。申し訳ない。周防さんがモンスターに襲われて、そのまま丸呑みにされてしまい、語り部たる僕自身が平静でいられなかった。

語る必要のない場面を、多く語り。

語るべき事柄を、語らなかった。

語るべき——たとえば。

僕が顔をうずめた三千字先輩の胸について、とか。

正直。

頭の中がぐちゃぐちゃになっていて——先輩と密着したあの瞬間について、まったく記憶がないのだ。この出来事は、青砥ソウヤの人生におけるガツカリエピソードの相当上位にランクインする。

詰まる所、語るべきに足る最も重要な出来事すら文章に残せない

以上、このエピソードは本当に、取るに足らない無駄なものに墮落する。

くだらないストーリーを語り終える時、果たしてどれだけの意味や意義が残るのか——読んでくれた人から、ヤマもオチもイミもないとお叱りを受けるのではないかと、僕は戦々恐々としている。

たとえば。

スライムに襲われた周防さんが一生消えることのない傷を負ったとか——襲われたショックで記憶を失ってしまったとか——結果としてピンチを救った僕に一目惚れしたとか——そんなヤマやオチやイミが残れば、語るべき理由になったのだろうけれど。

残念ながら、そんなことはない。

だから、こんな風に僕以外にはくだらないエピソードを語ってしまったお詫びに——お詫びになるのか、実はよくわからないけれど——僕は自戒の意味を込めて、罰を受けようと思う。

この顛末を記すことで、僕はまず確実に、彼女にお叱りを受けて——たぶん十中八九、頬をぶたれて、数日間は口を聞いてもらえなくなる。

でも、美しい女性と可愛い女の子のあれこれは、ダメ人間の愚痴みたいな物語よりは見所があるはずだ。

モンスターを退治して、夜の教室へ帰還した僕達。

スライムに呑み込まれたショックで呆然自失のままの周防さん。

そんな彼女の腕を掴み、力強く引つ張り上げて立たせた三千字先輩は、なぜか怪しい笑みを浮かべていた。呆然とたたずむ僕の方へ、ちらりと視線を向けた。その後で、先輩の冷笑はますます鋭利になった。

ぞくぞく、と。

背筋を氷で撫でられたように感じた。

三千字先輩が何を考えているか、僕みたいな人間にはわからない。いや、僕だけではなくて、普通の人達にもわからないだろう。僕が普通に生きている人々を見上げるように、普通の人々も三千字先輩に対しては、見上げるしかないだろうから。

誰にも理解できないような、三千字先輩。

そんな三千字先輩は、キスをしていた。

「……」

うん。

間違いではない。

周防さんが、キスをされていた。

「……」

云い方を変えてみても、結論は同じである。

心ここに在らずの周防さんも、さすがに衝撃的だったらしい。弛緩していた身体に、電流が走ったようだ。身体を離そうと必死の様相だったが、三千字先輩の手はがっしりと彼女の身体をホールドしていた。

どれくらい経っただろうか。

そんな一言を挟んでしまっぐらい、長かった。

さて、この空き時間を利用して、三千字先輩と周防さんの容姿について再度書き記しておきたい。もちろん、二人の容姿は既に述べた通りであるけれど、ここは描写が必要な場面だと思うのだ。

三千字先輩は長身である。手足が冗談のように細く長い。世界レベルのファッションショーの舞台の立つ一流モデルは、おそらく先輩みたいな人達なのだろう。切れ長の瞳、口元には冷たい笑み。美人であることは間違いないのだけど、先輩は、さながら抜き身の刃のような、危うさがある。綺麗と思って近寄った瞬間、ばらばらにされてしまうような——恐さがある。

比較して、周防さんだ。

黒髪ストレート、ちょっと吊り目。学校指定の制服も着崩すことなく、いつでもスカーフすら乱れない。はつきりと物を云うから、性格的には男子に疎まれるタイプだろうけれど、それでも人気があるのは、それだけ見た目で得をしているからだ。つまり、単純に、可愛い。

三千字先輩が、テレビの中にいる夢か幻のような美人であるとす

るならば、周防さんは隣家にこんな可愛い幼なじみがいれば幸せだろうな——という風に想像させるような、どこか距離の近い女の子だった。

うん。

まあ、こんな感じか。

そんな二人がキスしている。

最初は必死に抵抗していた周防さんだったけれど、一分ぐらい経った頃から、動きが弱々しくなった。悲鳴のようなくぐもった声もいつしか止まっていた。頬が赤くなっているように見えるのは、果たして気のせいだろうか。気のせいと思いたい。

この光景はいつまで続くのだろうか。

まさか、この場面で次回の引きにはなるまい——そう思っていた僕の思惑は外れ、美人と美少女のキスと僕、みたいな、どうしようもない展開のまま、次に続くのである。

それと、当然ながら、僕は周防さんに怒られるだろう。

残念無念、また明日。

『不思議と物語はゲームオーバーにならず、続いていく』

オチを、先につけておく。

モンスターについて、僕と周防さんは見事に肩透かしを受けた。

スライムに丸呑みにされた周防さんだけれど、見た目、その身体に怪我の類は見当たらなかった。それでも、たとえば毒やら何やら、後々どんな悪影響があるのか——ダンジョンにもモンスターにも無知な僕らには、わかったものではなかった。

だから、僕は、真面目に尋ねた。

スライムに呑み込まれたら、果たしてどうなるのか。

「濡れる」

「え？」

「え？」

三千字先輩の答えに、奇しくも、僕と周防さんの間抜けな声が重なった。

かいつまんで、説明しておこう。

スライムとは——いや、ダンジョンにおけるモンスターの多くは、仮初めの姿なのだ。それらは本来、不定形の力場であるらしい。魔力の歪み、世界の理が少しずれた状態——先輩はわかりやすく、そ

れを《澱み》と呼んでいた。

しかし、形のないものを、僕達のような一般生徒が被えるわけがない。

そのため、ダンジョンというシステムは、力場に《モンスター》という形を与える。叩いたり斬ったり——物理的な攻撃で始末できるように、云わば僕らのために倒されるお膳立てをされたのが《モンスター》という存在の正体である。

さて、それを頭に入れた上で、今回のスライムである。

「所詮は、レベル1の難易度だよ」

先輩はそう云った。

学園内に発生する《澱み》を、ダンジョン部では10の段階にランク付けしている。その中でも最低レベル、ランク1の《澱み》を具体的に説明するならば——たとえば、普通よりも暑いとか寒いとか、何も無い場所ですみずくとか、誰もいないのに気配を感じるとか、そんな感じ。

そうなのだ。

実は、今回のスライム、危険は皆無なのである。

「でも、考えてごらんよ。学校にいる時に、急に頭から水をかぶったように濡れるのは、かなり大変だ。何も知らない人からすれば相当な怪異だよ。そうした点では、レベル1とは云え、なかなか厄介なモンスターだったとも云える。奇襲を受けたカナメ君は、見事に

濡れてしまったわけだし」

その言葉を受けて、あらためて周防さんを眺める。

まるで夕立にでも降られたように、頭から爪先まですぶ濡れだった。周防さんはその状態に、かなり困っていた。乾かすには時間がかかるだろうし、濡れたままでは外を出歩けない。体側服に着替えて帰ることになるだろうが、それも目立つだろうし、家に帰ってからの言い訳も考えなければいけない。

なるほど。

確かに退治しなければ、学園には多大な迷惑がかかるだろう。周防さんが被害を受けたお陰で、僕はダンジョン部の存在意義について理解を深めた。

ちなみに、このくだらないオチを聞く頃には、周防さんも平静を取り戻していた。三千字先輩のショック療法が効きすぎて、しばらくは再び茫然自失だったけれど、どうにか回復したらしい。その際、僕に向かって「今のこと、誰かに云ったら許さない」と詰め寄ってきた。僕は当然、無言のまま首を縦に振った。

さて。

そろそろ起承転結の「結」も間延びしてきた。

巻いていこう。

三千字先輩がスライムの正体を語り終えた所で、この日は、お開きになった。びしょ濡れの周防さんは、三千字先輩の予備の制服を

借り受けることになって、部室の更衣室に向かった。僕は三千字先輩から正門で待っているように命令されて、異論を唱えられるはずもなく、犬のように従った。

しばらく待つと、学校指定のジャージ姿の周防さんが一人であらわれた。

「三千字先輩は、少し片付けたい仕事があるらしいわ」

つまり、僕達二人で先に帰れということらしい。

まあ、それはともかく……。

「云わないで。せめて、私の口から先に云わせて。青砥君の想像している通りよ。三千字先輩の制服を借りようとしたけれど……当たりの前に、先に気づくべきだったわ。スタイルが、絶望的に違いすぎる」

結局、自分のジャージに着替えたようだ。

周防さんはその格好で家まで帰るのが恥ずかしかったのか、頬を赤らめて、僕から顔をそらしていた。なんとなく無言のまま歩き始めて、しばらくした所で周防さんが尋ねてくる。

「青砥君、家どこ？」

僕は、繁華街の外れにあるアパートの場所を説明した。この青鳥町に引っ越して来てから日も浅いため、具体的な地名が思いつかず、ただたどしい説明になった。まあ、そもそも、僕が口を開く時は、いつでももつたない話し方になるのだけだ。

「いいな。うらやましい。随分と学校から近いのね。私の家は歩いて三十分以上かかるぐらい遠いから……ねえ、実は、ちよっとお願いがあるんだけど……ああ、そういえば、関係ないけれど、青砥君が私に返事をしてくれたの初めてね」

「ああ、そういえば……そうだね」

常識外れの経験をした後では、そんなこと、どうでもよく思えた。

「ごめん」

「別に」

僕は謝ってみたけれど、周防さんも、どうでもよさそうだった。すぐさま話題が戻る。

「ドライヤー、家にある？」

この日、僕と周防さんは、初めてちゃんと会話した。

加えて、周防さんが僕のアパートを訪れた初めての日にもなった。

周防さんは僕の家にあるドライヤーで、どうにか我慢して着られるぐらいに制服を乾かした。そうして、僕の家で着替えて（当然、僕は家の外に出ていた）、三十分程の滞在を終えて帰宅した。

三十分の会話。

女子と二人きり——それも、周防さん。

後になってから、僕は何度もこの時のことを振り返る。自分のことながら、僕は、自分が信じられない。この僕が、どうした因果で、女子と二人きりで三十分の会話という難行を成し遂げたのだろうか。

それはたぶん、レベル1の勇者が、大魔王に挑むような無謀。

だけど、不思議と物語はゲームオーバーにならず、続いていくのだ。

ちなみに、僕の食生活を支えるコンビニ弁当の空き箱の山を見た周防さんが絶句して、次の日から僕の分まで昼食のお弁当を作ってきてくれるようになったり、それを助けてくれたお礼と恥ずかしそうに云ったり、なんだかんだで昼食と一緒に取るようになったり、そのせいで路傍の石ころのような存在感だった僕の教室での立ち位置が「あの野郎」と男子からやつかみを受ける立場にクラスアップしたり——それらは、まあ、語るに足りないエピソードだろう。

次の日、三千字先輩がごく当然のように僕と周防さんを迎えに来て、選択肢が表示される暇もなく七守学園ダンジョン部の一員にされてしまったり、周防さんがその所行に怒って三千字先輩に文句を云ったり、そんな周防さんが再び三千字先輩に物理的に口を封じられたり、僕がその後の周防さんを慰めようとして八つ当たり気味に頬をぶたれたり——それらも、まあ、語るに足りないエピソードだろう。

語るべき事柄——僕が語りたと思った事柄は、既に語り終えている。

このエピソードは、詰まる所、以下の通りだ。

僕と周防さんが会話をした経緯について。

ダメ人間に友達ができました。

そんなエピソード。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2192w/>

七守学園ダンジョン部へようこそ

2011年11月6日10時11分発行